

藤田富士夫
(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

あるとき郷土史を研究する棚元理一氏と歓談していたところ、「どこかに、海老江のことをエーベと呼んでいるところがないだろうか」と尋ねられた。たまたま研究をしていた越中国東大寺領の「大藪荘」の開田図に「大江辺墓」があり、それはオホエベと呼ばれ、私考ではそれを古海老江（舟橋村）に現地比定しているのを思い出した。

棚元氏に、話題のもとを質したところ、“海老江加茂神社記編集委員会編『新修 海老江加茂神社記』海老江加茂神社改修委員会 2004年”にあるとされた。原本の入手をお願いしたところ、早速に海老江加茂神社奉賛会会長の長澤長保氏から送られてきた。開いて見ると、明治40（1907）年生まれの中坪正雄氏が、「下村とエーベ（海老江）の若者が力くらべをして勝ち、下村の神様をもらってきた…」と話し言葉で綴られていた。齢を重ねた土地の古老が、まぎれもなく海老江を「エーベ」と発音している。

かつて拙考を発表した折、舟橋村の古海老江と海老江を「大藪荘」開田図の西境界に充てた（註1）。その時には気づかなかったが舟橋村の海老江も、「エーベ」と呼ばれている（註2）。それが大江辺と重なれば、私考での現地比定をより補強する材料となる。本稿では、このことについて寸考してみたいと思う。

「大江辺墓」と現地比定

正倉院には、東大寺領の越中国新川郡荘園に関する2枚の地図が残されている。1枚は天平宝字三（759）年地図（越中国新川郡大藪野地開田地図）で、もう1枚は神護景雲元（767）年地図（越中国新川郡大荊村墾田地図）である。これは同一荘園のものである。

このうち天平宝字三年地図の南西隅に「大江辺墓」と書かれている。石原与作氏は、早くにそれを県内最大の円墳として知られる立山町の県指定史跡稚子塚古墳に充てて論じた（註3）。藤井一二氏や宇野隆夫氏は石原説を追認している（註4）。前提にある「大江辺墓＝稚子塚古墳」説が否定されれば、それを追認しての現地比定はすべて崩れることとなる。

従前の説に対して私は、稚子塚古墳は神護景雲元年地図の「三宅所」に相当するとした。この結果、「大江辺墓」は、現在の古海老江に比定できるところとなった（註5）。

神護景雲元年地図には「従郡川枯往道」があり、その方向に、富山平野を斜めに走る斜行道が認められ、終点には新川郡衙の可能性が高い米田大覚遺跡が所在する（註6）。このことから私考の合理性を説き（註7）、また、その道は常願寺川を渡河するが、景観的にも矛盾がないことを示した（註8）。

「大江辺」は「オホ・エーベ」である

私は、かつて「大荊荘（大藪荘）を立山町浦田から稚子塚そして舟橋村海老江から古海老江の地域に囲まれた範囲」に充て、「大江辺墓」を古海老江集落の南端に比定した。その位置は、天平宝字三年地図に描かれた「横江川」が、荘域に入って直線状に北流する変換地である。加賀藩末の碩学、森田柿園による『越中史徴』（註9）は、海老江の地名を「村内を海老江川（現在の細川）が流れていたことに由来する」と記す。横江川は、現在の細川と重な

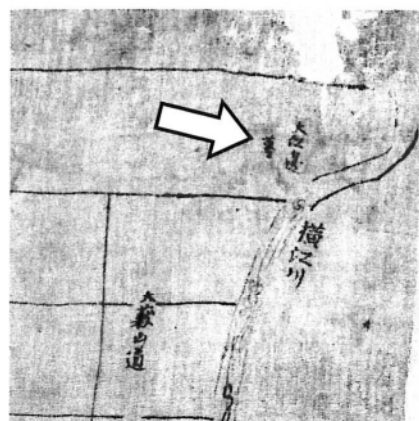


図1 天平宝字三年地図の「大江辺墓」の記載（矢印箇所）

る。「大江辺」墓は、一般に“おおえべ”とされている（註10）。これは自然な訓である。「大」は“オホ”で美称と解される。したがって、墓主は「江辺」「エベ」となる。

中坪氏の発音などから、それは“エーベ”または“エベ”と呼ばれていた可能性が高い。江辺と（古）海老江はともに“エベ”と呼ばれ、同一地にある。『越中史徴』は、今の細川はもと海老江川であったと記す。すなわちエーベ川である。流域に、古海老江と海老江の集落が成立している。川の始点に、「大（オホ）」と美称を冠せられた「江辺（エベ）」という人の墓が営まれたのである。棚元理一氏は、「江辺」の「江」は「江川」の意味を有するとしている（註11）。

地図では、「大江辺墓」の脇に「横江川」が流れている。両者は「江」の字が共通する。大江辺は、開田図に見える横江川の開削に関わる重要人物であると考えられる。横江川が海老江川となったのも“大江辺”の水利権と深く関わっているであろう。このように大江辺墓と古海老江・海老江が重なってくる。大江辺に率いられた人々が大藪荘の開墾に深く関わり（註12）、その母体が古海老江であった。そこから分村して海老江が開かれていったプロセスが想定できる。

8世紀の大江辺墓は“古墳”ではない

最初に、「大江辺墓」を稚子塚古墳に比定したのは石原与作氏である。大江辺を「大江部」と解し、そうであれば菅原氏と同祖の土師部となるとして、万葉集巻十七に現れる越中国庁の史生土師宿称道長に擬した。あるいは、『肯構泉達録』に見える武内宿称の一子“藤津”ではないかともした。それを葬ったのが稚子塚古墳であるという（註13）。このような想定によって擬されたのが大江辺墓＝稚子塚古墳説なのである。

「大江辺墓」は、天平宝字三（759）年地図に載っているのである。それは東大寺領大藪荘の開田に関わる重要人物の墓で、地図作成の直前に没した可能性がある。想像をたくましくすれば、地図作成に携わった人々が墓参を行ったかもしれない。それほど近い時間帯での出

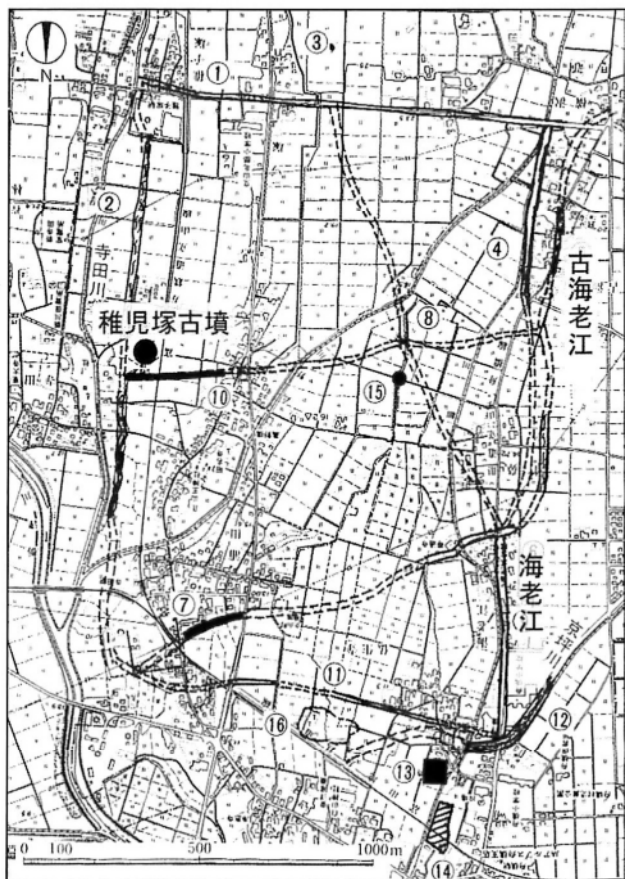


図2 天平宝字三年・大藪荘地図の現地比定（上が南）

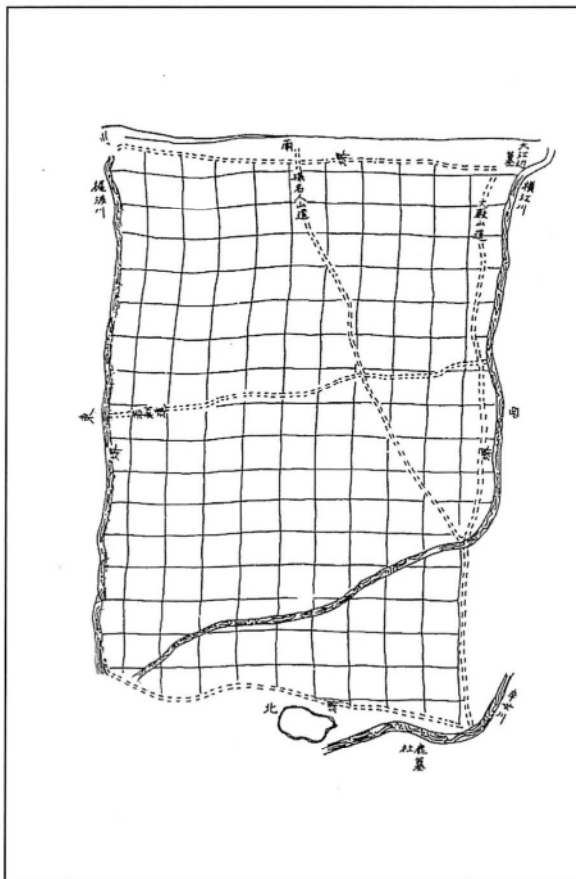


図3 天平宝字三年・大藪荘推定復元図（藤井 1997 年より）

来事であったと思われる。

「大江辺墓」は天平宝字三(759)年直前に築かれたであろう。このことは8世紀中頃の墓制において、「大江辺墓」の姿相が求められるところとなる。一般には、「七世紀に入っても各地の有力豪族は古墳を造りつづけるが、天武朝に入った六七〇年代以降は一部の有力豪族、天皇、皇族クラス以外の古墳築造は終わったと考えてよい」(註14)と解されている。

詳細に奈良・平安時代の墓制を見ると、それには①火葬墓、②土抗墓、③高塚古墳の横穴式石室の利用、横穴墓の利用、方形周溝遺構の利用、の3大別がある。古墳との関係で言えば、③の横穴式石室や横穴墓において、「追葬」や「前庭部からの遺物出土」が認められている。8世紀代の埋葬は、かかる群集墳や後期古墳、終末期古墳で稀に見られるのである(註15)。もちろん8世紀において、新しく古墳が築かれたということはない。

稚子塚古墳は5世紀中～後葉(古墳中期)に築かれた県内屈指の大型円墳である。主体部は確認されていないが、古墳の年代から石室は「竪穴式」系であることは疑えない。8世紀に追葬を許すような、横穴式の主体部は有しない。これまでの発掘調査で、墳頂部に中世墓が営まれていることは知られているが、古代の遺物の出土はない(註16)。

奈良時代において、中期古墳である稚子塚古墳の再利用は行われていない。むしろ地域表象としての機能に重点を置いている(註17)。

このようなことから大江辺墓＝稚子塚説は成立しないと思われる。大江辺墓は奈良時代の墓制の中で考えられるべきで、土抗墓あるいは方形周溝遺構であった可能性が高い。火葬墓も候補となるが東国では8世紀後半になって普及したとされているので課題が残る(註18)。なお、古海老江とその周辺に横穴式石室を有する古墳や横穴墓は知られていない。

おわりに

「大江辺墓」について私自身、古海老江の踏査を何度か行っているが、いまだ地表面での痕跡は確認できていない。それは墳丘を探してのものではなく、小字名や地割りに痕跡がないかと思ってである。天平宝字三年のころの墓は、決して古墳ではありえない。5世紀代の稚子塚古墳の被葬者名が8世紀中ごろまで残ったとする向きもあるかもしれないが根拠はない。被葬者の名前が分かる古墳があるとすれば特別に貴重な遺跡である。天皇陵古墳ですら被葬者に至っては曖昧模糊なのが現実なのである。

“江辺”は表音文字であろう。後に海老江の漢字が充てられたとも思われる。新湊の海老江もエーペーと称されていることを見ると、それはある程度普遍的な言葉として流布していたことが考えられる。これらの関係性について、全国の海老江地名とその特質の共通性の分析などからの解明が必要となる。

なお「大江辺墓」の周辺地域では、これまで古海老遺跡、利田横枕遺跡、横沢監遺跡が調査されており、それぞれ古代の遺物が出土している(註19)。これらには「大江辺」と関わる資料が含まれているに違いないと思っているが、今は想定するにとどめたい。

末筆となったが、執筆の契機を与えていただいた棚元理一氏と『新修 海老江 加茂神社 記』をご恵与いただいた長澤長保氏に厚く謝意を表したい。

【註】

- (1) 藤田富士夫「東大寺領大藪荘の現地比定と遺跡」『森浩一 70の疑問 古代探求』中央公論社 1998年
- (2) 『角川日本地名辞典 16 富山県』角川書店 1979年や『富山県の地名 日本歴史地名大系 16』平凡社 1994年では、それぞれを「ふるえびえ」「えびえ」としている。今回改めて確認したところ、角川書店本では海老江を「えーべ」(1164頁)、古海老江を「ふるえべ」ともいう、とある(1165頁)。地名について、海老江は「村内を海老江川(現在の細川)が流れていたことに由来するという」、古海老江は「海老江村の本村に由来するという」(平凡社本 283頁)とある。
- (3) 石原与作「東大寺領新川郡大藪庄と丈部庄」『越中史壇』7 越中史壇会 1956年、同「東大寺領新

川郡大藪庄と丈部庄(其の2)』『富山県地学地理学研究論集』第5集 富山地学会 1971年

- (4) 藤井一二『東大寺開田図の研究』塙書房 1997年/310頁。宇野隆夫「第4章 東大寺領大荊莊をめぐって」『立山町埋蔵文化財分布調査報告(協 1988年度)』立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1989年
- (5) 註1に同じ。藤田富士夫「東大寺領越中国莊園「丈部莊」の現地比定と若干の考察」『富山史壇』第135・136合併号 越中史壇会 2001年【『日本史学年次別論文集 古代特 2001(平成13)』学術文献刊行会 朋文出版 2004年に再録】
- (6) 富山市教育委員会『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書 富山市埋蔵文化財調査報告9』2006年
- (7) 藤田富士夫「古代越中国新川郡の『道』と『郷』に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第2号 2004年
- (8) 藤田富士夫「大伴家持の歌に見る渡河地点について」『富山市の遺跡物語』第5号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2004年
- (9) 森田柿園『越中志徴』富山新聞社復刻版 1979年/576頁。
- (10) 『富山県の地名 日本歴史地名大系16』平凡社 1994年/99頁。
- (11) 棚元理一「新修 加茂神社記を拝読して」『海老江加茂神社便り』2005年3月(プリント版)で、棚元氏は「江辺」は、辺の土地、「大江」は大きな江川という意味でしょう。御地、海老江の村名は大昔「奈古ノ江」辺りの集落が語源になったのではないのでしょうか」としている。このように「江辺」は“大きな江川のそばにある墓”(大きな海老江の墓トモ)で普通名詞と解すべきとしている。一理あるようにも思われる。しかし、筆者は本文で示したように特定個人墓を指すと解している。
- (12) 石原氏は、「東大寺大藪占定以前に、西方には孫名人村(浦田仏生寺、海老江等か?)百姓家があり、之等の指導者として、大江辺等が活躍していたのではないか」(註3・1956年論文)としている。この点は賛同できる。
- (13) 石原与作「東大寺領新川郡大藪庄と丈部庄」『越中史壇』7 越中史壇会 1956年
- (14) 前園実知雄「終末期古墳と寺」『考古学 その見方と解釈上』筑摩書房 1991年
- (15) 仲山英樹「古代東国における墳墓の展開とその問題点」『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制—墓制をめぐる諸問題—第4分冊』東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会 1995年
- (16) 立山町教育委員会『稚子塚古墳 第1次発掘調査報告』1994年、立山町教育委員会『稚子塚古墳 第2次発掘調査報告』1995年
- (17) 註7に同じ。藤田富士夫「附編・1 古代の表象としての若王塚古墳」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会 2001年。稚子塚古墳は、「若刺道」(天平宝字三年地図)の指標であり「庄所」(神護景雲元年地図)を表象する。古代の地域表象としての古墳のあり方については註7でも論じた。東大寺領大藪庄や丈部庄の庄域には、稚子塚古墳や竹内天神堂古墳、若王塚古墳、清水堂大塚などの古墳があるが莊園図では、存在は記されていない。地図作成者にとって、墳丘の存在は格別な関心事ではなかったようだ。それが、古墳に対する一般的思考であったと解すべきであろう。
- (18) 註15に同じ。
- (19) 舟橋村教育委員会『富山県舟橋村 古海老江遺跡発掘調査報告』2002年、立山町教育委員会『利田横枕遺跡』2001年、立山町教育委員会『横沢(鑑)遺跡』1999年